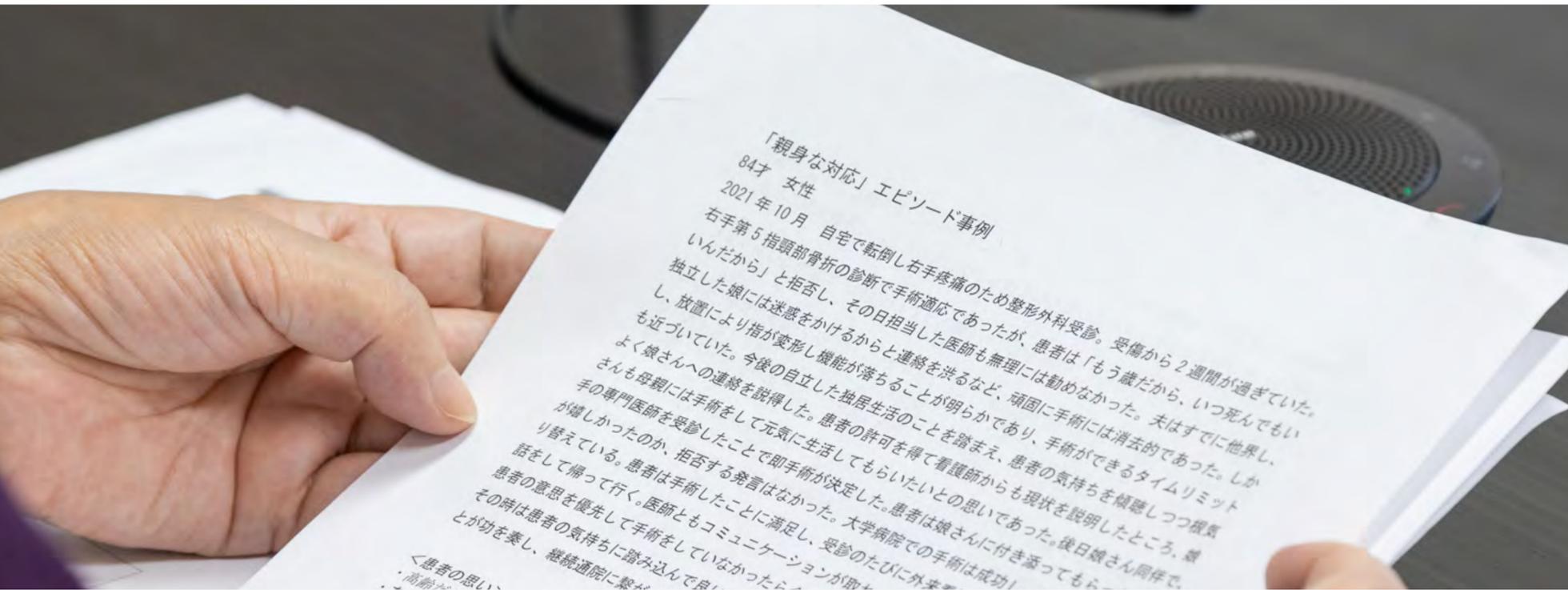


部長会議

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



健育会グループでは毎月すべての病院の部長が出席する分野別の会議を開催しています。今回は6月に開かれた看護部長会議とリハビリテーション部長会議の内容を報告します。

今年のスローガンは、「愛情を持って親身な対応」を掲げています。患者さんやご家族に家族と同じ愛情をもってケアするように努力し、サービス業を超えた医療介護を提供するという事です。簡単に実現できることなく、奥の深いテーマです。職員一人一人が愛情をもって親身な対応ができるようになるにはどのような取り組みをすればよいか、これまでも、本部と現場で話し合いを行ってきました。看護部門では、日々のカンファレンスを通して、患者さんやご家族の想いが反映された看護計画になっているか、ということに注目し、カンファレンスの最後には、必ず、「この看護計画は患者さんのためになっているか」ということを声に出して確認することにしました。

リハビリ部門では、実際に、愛情をもって親身な対応ができた事例がないか、ということスタッフに問いかけ、具体的な事例をあげて共有していくことにしました。

今回は、6月度の看護部長会議とリハビリテーション部長会議でのディスカッションの様子をご紹介します。



看護部長報告会では、各病院での取り組み状況や事例の報告がありました。その中からいくつか抜粋してご紹介します。



●熱川温泉病院

患者さんと表面的な関わりを持つのではなく、療養中に本人の職業や関心ごと、望んでいることを聞き出し、できるだけ患者さんの思いに寄り添うことを心がけています。

骨髄異形成症候群を患う92歳男性の終末期ケア事例では、もともと農家で農協にも勤めていたことから、療養生活の中でもスタッフと一緒にかいわれ大根を育てて記録し、農業に触れてもらいました。これにより日常生活の感性を取り戻し、穏やかに過ごしてもらうことができたと思います。日々のカンファレンスで、残り少ない人生を過ごす患者さんに親身な対応をするためにはどうすればいいかをディスカッションすることで、スタッフにも変化が生まれたと実感しています。



●石巻健育会病院

入院時に患者さんや家族の要望を細かくヒアリングし、カンファレンスで多職種に内容を共有することで、退院支援に繋げていくことを目指しています。これにより、従来よりもさらに細かな部分まで話し合いが行われ、患者さんにも丁寧に接するようになりました。さらにスタッフ一人一人が、患者さんの人生に触れることに意識して関われるようになってきたと思います。

事例では、慢性呼吸不全、心不全を患う80代男性が不安を感じていたため、夜勤看護師がベッドサイドで傾聴したところ、心配事や今後の治療についての想いを聞くことができました。そこで翌朝カンファレンスを行い、ご家族にも承認を得た上でACPの介入が決定。同時に患者の想いを記した「つなぐノート」を用いて本人の思いを家族と共有しました。患者の気持ちを繋いでいくことは非常に重要なことです。深く考えないとできない行為、看護計画に出てこないようなケアこそが親身な対応だと考えています。



●花川病院

「退院支援の看護計画」の取り組みを行なって3年目になります。今年は看護師視点の目標が多いことに着目し、患者視点を意識して目標を設定。カンファレンスでは、患者さんやご家族の退院後の希望に向けてケアができていないかを確認するため、生活歴や患者・家族の思いを掘り下げて聞き出し、内容共有を行なっています。そして、今後何が必要かを課題抽出してケアに取り組むようにしています。

事例では、脳梗塞、高次機能障害で全介助状態になり、暴力暴言転倒などが見られたため脳外科病院で四肢抑制され、当院に転院してきた70代女性についてです。入院時から、これまでの家庭や社会参加でどのような役割を担ってきたかを傾聴したことで、ご本人が自身の人生を振り返ることにつながり、自分らしさを取り戻しました。さらにスタッフとの信頼関係の構築にも役立ちました。同時に本人の意思を尊重しながらリハビリを強化し、2ヶ月で無事に退院が実現。最後にはご本人から笑顔で感謝の言葉を頂くことができ、親身な対応に努めた結果だと実感しています。



その他にも、患者さんの「自宅に帰りたい」という想いを尊重して親身に受け止め、自己吸引や家族の指導なども行い、自宅へ戻ることが実現したという事例が報告されました。

森マネージャーからは次のコメントがありました。

たった数時間、自宅に帰るだけでも患者さんの様子が大きく変わると実感したスタッフもいたとのことで、非常に素晴らしいことだと思います。また患者さんだけでなく、家族の要望にもきめ細やかに対応していきたいという意見も多く聞かれたとのことで、こうした要望を多職種で共有していくことが、寄り添ったケアに欠かせないことだと思います。引き続きカンファレンスを通しての取り組みを行いながら、7月には、外部の講師の先生を招いての勉強会も実施していきたいと思っています。



リハビリテーション部長会議では、事例の共有を中心におこないました。各病院から発表があり、いずれの事例もリハビリテーションの治療をするのはもちろんのこと、プラスして患者さんやご家族の立場に一步踏み込んだ、気持ちに寄り添った対応をしていました。まさに、家族と同じ愛情を持って親身な対応をしたことが感じられる症例でした。リハビリテーション部門では、引き続き事例の共有を通しての取り組みをおこなっていきます。



今回のディスカッションでは、愛情を持った親身な対応の具体的な事例の共有も行うことができました。こういったことを通して、職員の意識が変わり、行動が変わることにつながるのではないかと思います。試行錯誤しながら継続した取り組みをおこなうことで、患者さん、ご家族に愛情を持った親身な対応ができている病院グループになることを目指してまいります。